

S M ツアー：貴女の妄想叶えます

## 第5話：寒中座禅（転がし）

### 修行



濠門長恭

## 目次

登場人物 .....	- 3 -
1. 登門 .....	- 10 -
2. 得度 .....	- 32 -
3. 滝行 .....	- 45 -
4. 祓行 .....	- 65 -
5. 巡拝 .....	- 79 -
6. 灸行 .....	- 92 -
7. 相撲 .....	- 107 -
8. 還俗 .....	- 121 -
後書き .....	- 123 -

## 登場人物

真園 蕾 (蕾淫) 21歳 SOS裏添乗員

高山社長の試験に合格して裏社員に昇格。

西川麻凜 (凜淫) 23歳 SOS裏添乗員

今回は新人指導(OJT)を兼ねる。

木島菜穂子 (爛淫) 39歳 SOSツアー客

ドンキーガールのヒロイン。

林 円花 (円淫) 22歳 SOSツアー客

女囚性務所を体験している。

君島芽美 (芽淫) 18歳 SOSツアー客

過激SMに憧れる中二病的妄想処女。

小室ゆかり (悦淫) 25歳 SOSツアー客

被虐願望が原因で破局しての傷心参禅。

島 野乃花 (花淫) 26歳。 一般参加者

交際男性を逆調教する目的でペア参加。

畑田美咲 (咲淫) 29歳。 一般参加者

医師の夫とともにペア参加。看護師。

妙覚 主催者。古武術研究会第八代会長。

积覚 住職。独立宗教法人[参禅世会]代表。

朴念 他寺の僧。アルバイト(?)。

訥念 朴念の同僚

昭学 高山昭雄 SMツアー社の社長。

蕾のOJTと裏社員のスカウトが目的。

広学 畑田美咲の夫

ボランティア医師として参加。

英学 島野乃花のパートナー。

その他の一般参加者

健学／秀学／大学／友学／元学／純学／善学  
／晴学／俊学

以上、サディスト16人とマゾ女8人。

## Splendid Marvelouse Tour へようこそ！

弊社では貴女様の被虐願望を叶えてさしあげ  
るために、

**Suspenseful Option System** を御用意致し  
ております。

**Non[Vartual / Fantasy / Role-playng]** 最少  
催行人員は1名様です。

末尾のメールフォームより、できるだけ詳  
しくご要望をお知らせください。

弊社が貴女様に最適なプランを個別に設計  
させていただきます。

なお、貴女様の安全は社会的にも肉体的にも  
守れるよう最大限の努力を致しますが、必  
ずしもこれを保障するものではありません。  
(現在まで、事故例はありません)

弊社にて定期的に催している企画もござい  
ます。国内限定で安全性も高く、料金も超格  
安に設定していますので、まずはこちらをお  
試しになられることを推奨致します。

1：新年寒中水泳 1月4日（日帰り）

催行人員：1名様～30名様

参加費：交通費のみ（諸経費はお客様負

担です)。

- ・男性同伴者との参加も可能です。(推奨します)。
- ・禪での参加ですが、胸に晒を巻いていただきます。

2：禪海女ショーと夜の鮑売り 夏季随時、日程応相談。

催行人員：1名様～3名様

参加費：交通費のみ(諸経費不要)

- ・地元女性の参加者が素潜りを指導します。
- ・ベテラン海女から私的性裁を受けることがあります。
- ・宴席での接待は義務ですが、鮑売りは自由参加です。

(売上代金の70%を還元致します)

3：夏季柔道合宿 8月12日～8月17日

催行人員：3名様～8名様

参加費：交通費+3万円(諸経費含む)

- ・練習、入浴、宿舎とも男女同室です。
- ・道着(上衣のみ)は素肌に着用していただきます。
- ・柔道未経験者にも、手取り足取り指導い

たします。

- ・貞操の保証は致しかねます。

4：寒中座禅修行 12月10日～12月16日

催行人員：2名様～5名様

参加費：交通費のみ（諸経費不要）

- ・修行は女性のみですが、一般男性が補助します。
- ・警策は肩だけを叩くとは限りません。
- ・姿勢の悪い女性は、縄やベルトで物理的に矯正します。
- ・座禅転がしは拒否できません。ピルの使用は任意です。

その他、各種企画を検討中です。

国外でのイベントも新たに立ち上げました。  
国内に比べてリスクが高くなります。

A：女囚性務所 不定期

催行人員：1名様～3名様

参加費：一般ツアー費用に準じます。

- ・実際に女囚としてVIPへの性的奉仕に

従事します。

- ・看守たちの女囚への虐待は日常化しています。

- ・軽度の半永久的な肉体への損傷を受けます。

- ・司法取引による奉仕ですので、『犯罪歴』にはなりません。

B：ポニーガール 冬季を除く

催行人員：1名様～4名様（厩舎の空き具合によって変動します）

参加費：一般ツアー費用に準じます。

- ・年齢や容姿によっては、使役ロバにされることもあります。

- ・調教やパレードの様子は映像作品として販売されます。

- ・種付けは拒否できません。ピルの使用は任意です。

C：リョナファイト（対戦相手が女性の場合もあります）

催行人員：1名様または2名様

参加費：諸経費はお立替します（ファイトマネーで清算）。



- ・高額賞金の提供者（1名）に24時間レンタルされます。
- ・レンタル中のプレイ内容に異議は認められません。  
（拒絶して拷問される自由はあります）。
- ・回復不能なダメージは与えないように配慮されています。

SMツアー有限公司

## 1. 登門

飛騨山系麓の無人駅で十人もの大集団が下車した。西川麻凜と真園蕾、裏添乗員と裏添乗員見習いに率いられた四人のSOSツアー客。そして、二組のカップル。どちらも『善羅参禅会』への参加者だった。

一行は、迎えに来ていたマイクロバスで、山奥にある寺へと向かった。

時刻は午後二時をまわっている。昼食は駅弁だったが、蕾は半分以上を残していた。これから始まる七日間の被虐合宿に、ツアー客よりも緊張と不安を感じていたのだ。

交際相手にねだって、浴衣の紐で手を縛られたり手拭いで目隠しをされたり、冗談半分のスパンキングくらいは経験していたが、本格的なSMプレイは高山社長から受けた『適性試験』が一度きりだった。その試験に合格して、蕾はSMツアー社の裏社員に昇格した。給料が上がったから、昇格だろう。SOSは添乗手当も高額だし、この夏のピンク海女ツアーでは鮑の売上代金も臨時収入になったそうだ。

とはいえ。筋金入りのマゾ女性が尻込みするような場面で、率先して責められてツアー客を悦虐に導かなければならないのだから、責任が重いというよりも、身体への負担が厳しそうだった。まして蕾は、ミイラ取りがミイラになってアメリカでリョナファイト巡業中（ビザの都合で、名目上はSMツアー社のアメリカ駐在員）のハードマゾの村上詩織の後釜と目されているのだから、ますます不安がつつのる。

この『善羅参禅会』はSMプレイではないと、社長にも麻凜先輩にも念を押されている。どんなに本気で厭がっても、責めを中断する権利は男性側にしかない。もともと、合宿中のNG行為はきちんと決められている。想像するだけで吐き気を覚える食糞系は無いし、生き物も使わない。山中だから、冬でも不可抗力で虫が肌を這うくらいはあるけれど。夏の善羅参禅会では藪蚊責めなんておぞましい拷問があるそうだが、ありがたいことにSOSの企画では冬季しか扱っていない。というか、厳寒期以外は主催者側の人脈で参加者は足りているそう。雪よりも藪蚊が好きな女性もいるのかと、蕾は寒心してしまう。

四十年ほど前に作られたという新道（のわりには、すれ違いもできないしガードレールも無い）を三十分ほどかけて登りきった終点は、鉄柵に囲まれた狭い駐車場になっていた。

[この先私有地につき無断立入禁止]

[イノシシ除けの罾や電撃柵があります]

大きな看板が目立つ。

駐車場では、十人ほどの男たちが一行を待ち受けていた。僧形が三人で、あとの者は『どてら』のように分厚い作務衣姿だった。その中に高山社長の姿があったが、麻凜も蕾も素知らぬ顔をしていた。社長は蕾のOJTと三人目の裏社員のスカウトを目的として、一般参加者を装っているのだ。

袈裟のきらびやかさからも上位とわかる紫色の法衣をまとった僧が、一行の前に立った。

「それがしが住職である釈覚じゃ。独立宗教法人『参禅世会』の代表でもある。これなるは朴念と訥念」

意図的に時代劇めいた言葉づかいをしていると、蕾は判断した。プレイではなく被虐修行は、もう始まっている。

「そして、ぼくが『善羅参禅会』の主催者である妙覚です」

マイクロバスから降りてきた運転手が、意外な身分を名乗った。突っ立った短いポニーテールみたいな『ちょん髷』っぽいヘアースタイルの中年男が、実は明治末期から連綿と続いてきた『古武術研究会』の八代目会長だということを、麻凜と蕾は知っている。もっとも、由緒があるとも言い難い。途中で何度も十年単位の休会を繰り返してきたし、その都度に会員は新規募集で集められている。それでも、大正時代からこっち、この寺が女性に悦虐修行を積ませる場（のひとつ）になっているのだから、そんじょそこらのSM同好会とは格も規模も違っている。

ちなみに、参禅世会と古武術研究会とは、どちらがどちらに属すという関係ではない。この寺（新光山無明寺）では、社員研修やサークルの合宿座禅会も催している。こちらは利益率が低く、世間向けの体裁のようなものだが。

「ここは、かつて女人禁制の修験場であった」

釈覚が奇妙なことを言いだした——と思った者は、ひとりもない。SOSツアー客も予備知識を教えられていたし、二組のカップルも古武術研究会の会員だった。

「この石段を上がろうと試みる女は――」

急角度に立ち上がった石段を釈覚が振り返った。一段ずつの高さが五十センチほどもある。駅など公共の場の階段なら、三段飛ばしにも相当する。

「縄で胸をつぶし、股間に疑似陽根を作らねばならなかった」

疑似陽根がWディルドを意味するのなら、ツアー参加者の君島芽美には途方もない試練になると、蕾は懸念した。彼女は、まだ在校中の処女なのだ。

「さすがに、女性の人権も多少は配慮されるようになってきた昨今では、そんな無茶も要求できん。俗世の穢れさえ落とせば、それで善しとしておる」

麻痺と蕾を含めてSOSの六人は、釈覚の言葉の意味がわからなかった。全裸で座禅をさせられて、姿勢を正すという名目で緊縛されて座禅転がしにかけられて、野外でも修行させられるとしか教えられていなかった。あとは、現地での（マゾ女性にとっては）お愉しみということだ。

カップルで参加している二人の女性が、それぞれに服を脱ぎ始めた。三十路前後のぽっ

ちやりした女性は、目の前に居並ぶ男たちに正面を向けたまま、ゆっくりと。二十代半ばのスリムなショートボブは、パートナーに向き直ってから、テキパキを超える早さで。

「なにをしておる。なんじらも、俗世の穢れを落とすのだ」

釈覚に叱られて、蕾はいそいでコートを脱いだ。股下ゼロcmのミニワンピースを寒風が吹き抜けて、パンストなんて野暮なものは穿いていない生足に鳥肌が立った。

「覚悟を決めましょう」

麻凜にうながされて、SOSの四人も脱ぎ始めた。

そうか。常に顧客のことを考えなければいけないんだ——と、そこに気づくだけの余裕が、まだ蕾には残されている。短大を卒業して就職したばかりの蕾には、自分の被虐を悦虐に変えるのが、やっとだった。今の麻凜と同じ歳になる三年後には、先輩に追い付いているだろうか。いや、こんな『仕事』をそんなに長く続ける自信すら無かった。

蕾と麻凜は気合のはいった露出服を着ているが、四人はまちまちだった。

図抜けて最年長の木島菜穂子は地味なパン

ツルックで、防寒対策もじゅうぶんだったが——ショーツを落とすと、見物している男性陣がどよめいた。

「あれ、タトゥか。ずいぶん目立つな」

「いや、焼き印じゃないのか？」

菜穂子の下腹部には、S L A V Eの文字が刻まれていた。文字を囲んで、ショーツでぎりぎり隠れる大きさの逆三角形。薄赤い線刻が、はっきりと盛り上がっている。この夏にポニーガール牧場で使役ロバとして酷使され、最後の日に本人の希望で刻まれた焼き印だった。

個別企画のツアーで女囚性務所に服役していた林円花は、ごくふつうに膝上十センチのツーピースだったが、その下にはなにも着けていなかった。

S O Sに初めて参加した二十五歳の小室ゆかりは、蕾以上に大胆なコスチュームで、膝丈のファーコートの下は素裸だった。

最年少の君島芽美へのどよめきが、じつはいちばん大きかった。なにしろ、コートの下から現われたのはセーラー服だったのだから。しかも、ほかの女性たちが全裸になっても、ようやくスカートを脱いだところだった。男



たちの視線を一身に集めて、芽美は指先を震わせながら、それでもためらったり羞ずかしがったりは、内心はともかく素振りには表わさずに脱衣を終えた。

「ふむ……」

両手で自分を抱いて寒さに震えている八人の女性たちを釈覚が見回して、ことに蕾と麻凜に目を留めた。

この二人がガイド役として、みずから率先して被虐に身を晒す立場にあると、主催者側は知っている。

「どうじゃ。なんじらは、古法に則った試練を受けてみるか？」

蕾としては、いくらツアーコンダクターでも、そこまで『お手本』を示す気にはなれなかった。

「お願いします」

それなのに、麻凜は躊躇しなかった。となると、蕾としても志願せざるをえない。

「よい覚悟じゃ。では妙覚殿、お願い致す」

マイクロバスの運転をしていた妙覚が、縄束を手にして麻凜の後ろに立った。異様なヘアスタイルのせいで釈覚より若く見えるが、もしかしたら同年代かもしれない。

妙覚が、麻凜の両手を後ろにねじ上げて、手首を縛った。

「手を縛るんですか？」

縄は乳房をつぶすためのものだと思っていた蕾は、予想外の展開に驚いた。

「縄を掛けるときに手首を縛るのは、緊縛の常識だ」

たしか、高山社長もそんなことを言っていた。緊縛の第一の目的は、相手の自由を奪うことだ。そのうえで、苦痛を与えたり見栄えをよくするための縄を存分に掛ける。手が自由なままでの亀甲縛りなど、本末転倒だ。それは、蕾にも納得できる理屈というか、緊縛の美学だった。けれど、今は乳房をつぶすことだけが目的のはずだ。

もちろん、蕾も麻凜も抗議はしない。なにかと口実をもうけて女性を甚振るのがサディストの常套手段であり、マゾ女性としてもそのほうが受け容れやすい。

「さあ、プレイを始めよう。縛るよ」

では、まさしくプレイでしかない。そんなものを、SOSのクライアントは求めている。

妙覚は、あっというまに麻凜を高手小手に

縛り、上下の胸縄で乳房を絞り出しておいてから、縦横に縄をめぐらせて、乳房をつぶした———というか、ボンレスハムのようにしてしまった。

「くうう……苦しい」

呻く麻凜の声には、すでに悦虐の恍惚がひそんでいる。

麻凜の腰に縄が巻かれた。上体を縛った麻縄ではなく、毛羽立った荒縄だった。蕾が予想したとおりに、二重にした荒縄で大きな結び玉が作られて、麻凜の股間に埋め込まれた。

「きひいい……」

股間に通された縄を後ろへ引き上げられて、食いしばった歯のあいだから悲鳴が漏れる。

しかしそこにも、陶酔が紛れていた。

「あの……ペニスは作らないのですか？」

釈覚は疑似陽根と言っていた。

「これが睾丸に相当する」

股間を深く割っている結び玉を妙覚が揺すって、麻凜を呻かせた。

「陽根は睾丸の上にある」

妙覚は縦縄を左右に割って、クリトリスを摘まみ出した。すでに尖っている小さな器官の包皮を剥けば、ミニサイズの亀頭に見えな

いこともない。それをタコ糸で縛って引き伸ばし、根元を二本の荒縄で挟みつけた。最後に、クリトリスを縛ったタコ糸が荒縄を巻いて、引っ込まないようにした。

「生身の女体から男根を引き出す秘術は、古武術研究会百年の伝統だ」

妙覚が蕾を振り返った。

「さて、つぎはきみの番だよ」

被虐の場でサディストから『きみ』と呼ばれることに、蕾は軽い違和感を覚えた。釈覚の時代劇めいた物言いは、おなじ違和感でも修行の場にふさわしい気もするのだが。

両手を背中に高くねじ上げられて、手首を十文字に縄が巻いた。

（え……！？）

きつく締めつけられているのに痛くなかった。胸縄も同様だった。息が苦しいほど締め付けられ、乳房を上下から縊り出されて、それが心地良かった。

「あう……くうう……」

麻痺と同じに、快感混じりの声が自然と口から洩れた。

古武術研究会というのが、実は捕縄術と拷問術に特化していると、これも高山社長から

のブリーフィングだが。たしかに、社長とは比べものにならない手際の鮮やかさだった。まるで縄に抱き締められているようだった。

しかし、縦縄には蕩けている余地などなかった。結び玉に淫裂を割り開かれ、粘膜を荒々しくこすられて、びくんっと反射的に腰を引いた。赤く焼けた無数の針を突き立てられたとでも形容したくなる激痛だった。

逃げた腰は、縦縄をつかんで引き戻された。「痛い……すこしでいいから、緩めてください」

「甘ったれるんじゃないわよ」

蕾は麻凜先輩に叱られた。

「クリちゃんを縛られたら、こんなものじゃすまないんだから」

「……ごめんなさい」

内勤のときに優しく(ふつうの事務仕事を)指導してくれたときとは、まるで雰囲気も違っていった。もちろん、ふたり一緒にこういう『仕事』をするのは、これが初めてだったが。

クリトリスを縄の間から引き出されて包皮を剥かれて。乱暴にしごかれても、そこまではマゾヒスティックな快感もあったのだけれど。本物の陽根なら雁首にあたるくびれた部

分をタコ糸で括られると、痛みと快感とが拮抗して腰の奥まで沁み込んできた。

タコ糸がクリトリスの上下で縦縄を結束すると、また灼熱した針で貫かれる激痛が甦った。

「そこに縦一列で並べ」

そのわずかな移動が、蕾にとっては生まれて初めての試練だった。

「く、くううう……」

わずかに足を動かすだけで、敏感な粘膜が荒縄にしごかれる。こんな状態では、段差の大きな石段を登るところか、平地を歩くのさえ拷問に等しかった。小刻みなすり足で動いて、蕾は列の最後尾に並んだ。

麻凜が先頭に立って、その左右に二人の男が並んだ。男の腰にトラロープが巻かれて、二メートルほど伸ばして結び玉を作って左右のロープがひとつにまとめられてから、麻凜の腰に巻き付けられる。緩く二回巻いてから後ろで結び目が作られて、一メートル半ほど空けて、麻凜の後ろに立つ菜穂子も同じようにつながれた。

誰かが転んだときに転落を防ぐ命綱だと、蕾も理解した。

添乗員ふたりが前後に配されて中の六人は——木島菜穂子、畑田美咲、島野乃花、小室ゆかり、林円花、君島芽美。歳の順に並ばされていた。

「では『試練の石段』に挑んでもらおう。どんなことがあっても落伍などさせぬから、そのつもりでおれ」

ジャララン、バシンッ！

「きゃあっ……痛いっ！」

不意に尻を叩かれて、蕾が悲鳴をあげた。振り返ると、浅黄色の僧衣をまとった若い男が、先端に金属環の装飾(?)を施した杖を手にしていた。

「このように、まさしく鞭撻してやる」

同じ姿をしたもう一人が、列の横に立った。同じように、杖を持っている。

「さあ、前へ進め」

「あの……荷物は持たなくていいんですか？」

木島菜穂子が尋ねた。何百キログラムもあるリヤカーを膾だけで牽引していた彼女なら、スーツケースを持って石段を上がるくらい、苦にもならない——すくなくとも本人は、そう思っているのだろう。

「まとめて運んでやる」

釈覚が駐車場の隅を指差した。

駐車場には蕾たちが乗ってきたマイクロバスのほかに、他県ナンバーの自家用車が二台と、地元ナンバーの軽トラックがあった。そして釈覚の指差した先には、オートバイに牽引された細長いリヤカー。その荷箱に、全員の荷物が積み込まれていた。

六泊七日とはいえ、替え上着も下着もメイク用品も不要なのだから、女性たちは小さなスーツケースがひとつだけという身軽さだった。むしろ、男二人の荷物のほうが大きく、畑田美咲のパートナーだか御主人様だかにいたっては、スーツケースのほかに大型のトランクまで持ち込んでいた。どうせ中身は自前の縄とか鞭とかがぎっしりなんだろうと、蕾は想像した。

麻凜と蕾を緊縛した妙覚が、駐車場奥の、一見しただけではそれとわからない出入口を開けて、オートバイで（ゆっくりと）走り去った。防寒作務衣を着た男のひとりが、出入口を閉めると、そこはどう見ても、ただの鉄柵でしかなくなった。

ふたたび釈覚にうながされて、麻凜が石段に向かう。麻凜は前に並んだ二人の男に引っ



張られる形で、いやおうなく——小さな歩幅でちょこまかとついていく。

「く、くうう……」

呻きながら大きく足を上げて、最初の一段を上がった。そこで両足をそろえてから、つぎの一段に挑む。

後ろの女性たちは、背を丸めた姿勢で両手で胸を抱きながら、こちらは苦も無く五十センチ以上の段差を踏み上がっていく。

そして、蕾も石段に直面した。

ぐっと足を上げると、股間に灼熱が奔った。クリトリスに突き立った毛羽が、粘膜を引っ搔く。

「ぎひいい……」

脳天まで激痛が突き抜けて、目の前がかすみ、ふらあっと後ろへ倒れかかった——のを、横についていた作務衣姿の男が抱きとめてくれた。

ジャラン、バシンッ！

杖で尻を叩かれて、おもわず腰を前へ逃げて、そうするとクリトリスにいつその激痛が奔った。

蕾が見上げると、麻痺はゆっくりとだが、一段ずつ踏みしめて登り続けている。苦痛系

が苦手だと言っていたけど、それならわたしは超絶に苦手だ——そんなふうに思った。

が、立ち止まっていることは許されない。腰に巻かれたトラロープがぴいんと張って。すぐ前にいる君島芽美が立ち止まって、心配そうに振り返った。

添乗員が顧客に迷惑をかけるなんて、あってはならないことだと自分を励まして、蕾は激痛に呻きながら、つぎの一段を上がった。

「くうう……ふう……くうう……」

一段上がっては両足をそろえて一息ついて、それから次の段を上がる。

「きひいいい……痛い痛い痛い」

麻痺の艶めいた悲鳴が聞こえた。蕾にとっては快感の余地などない女性器への激烈な刺激にも、麻痺は悦虐を味わっている。

石段に目を落として、一段また一段と、蕾は登っていった。五十センチ以上の段差を乗り越えるために足を大きく上げると、結び玉がこねくられ毛羽が粘膜を突き刺して、激痛が脳天まで突き抜ける。踏ん張って身体を引き上げるときも、脚の動きが縦縄を引っ張る。

じきに、蕾は呻き声をあげなくなっていた。繰り返される劇痛に、神経が麻痺したような

感じだった。と同時に。頭の奥がじいんと痺れてきた。自分が自分でないような、かといって別の視点から自分を観察している離人感とも違う——不思議な感覚だった。性的な快感は伴っていないが、この状態がずっと続いてもかまわない気分になっていた。

「よおし。みな『試練の石段』を登りきったな。得度を許すぞ」

釈覚の大声で、蕾は我に還った。山の中腹を切り拓いたにしては広い境内に立っていた。

ほんとうに凄まじい試練だった——と自分を褒めかけて、ほんとうの修行（被虐）は、これから始まるのだと思い直した。恐れおののいたのでは、ない。その証拠に——クリトリスがいつそう凝って、タコ糸が食い込む痛みが、もはや快感になりかけていた。

「得度式まで、女人房で休んでおれ」

正面の本殿に向かって右側には、小さな房舎が軒を連ねている。女性たちの修行を助ける『先達』言ってしまうえばサディストたちの宿舎だ。左側の女人房は、集団軟禁（と乱交）に適した、細長い倉庫のような建物だった。

女性たちは、麻凜と蕾の縄が解かれるまで、寒風の中で待っていてくれた。目の当たりに

したふたりへの責めと、自分たちを待ち受けている被虐への期待とで――鳥肌を立てて両腕で自分を抱いてはいるものの、歯の根が合わないほど震えている者はいなかった。

縄をほどかれて。痺れるような余韻が全身を包んで、この場で自慰をしたくなるほどのもどかしさを蓄は感じた。が、さすがにそんな真似はできない。八人でひと固まりになって、女人房へ入った。

「はあああ……ふつうに寒い」

「どういうこと？」

「暖かくはないけど、死にそんな寒さでもないでしょ」

「窓ガラスは二重になっているみたいね」

野乃花が窓ガラスをコツコツと叩く。

「でも、エアコンもストーブも無いみたい」

「わたくし、昨年もこのイベントに参加させられたんですけど」

ぽっちゃり目の実咲が、すんなりと割り込んできた。

「ひとり一枚の毛布を与えられるきりで、最初の夜はみんな震えていましたわ」

部屋の隅に重ねられている毛布を指差す。

「でも、二日目からは暖くなる工夫をしま

したから、それほどつらくなかった——けれど、寝不足になりました」

「え……？」

「どゆこと……ですか？」

これは、女学生同士の話し言葉の癖が抜けていない芽美。

「雪山での遭難と同じ——と言えば、わかってもらえるかしら」

「……ああ！」

麻凜が率先して動いた。

「得度式が始まるまで時間がないかもしれないけれど、試してみませんか。こうやって裸で震えていても、無意味だし」

蕾も手伝って、三枚の毛布を板張りの床に広げた。

「抱き合うというより、寝転がって二段に重なって押しくらまんじゅうをする感じよ」

実咲が毛布の上であお向けに寝転がる。すぐに菜穂子と円花が、その両側であお向けになった。芽美とゆかりと野乃花は、ちょっとためらうふうだったが、大勢に流されてといった感じで、三人のあいだに二段ではないが割って入る形になった。

「ほんとうは、上下互い違いになったほうが

ムフフなんですけどね」

経験者の実咲が意味深に含み笑った。

麻凜と蕾が、重なり合った女体の上に残りの毛布を掛けて、二人もその中に潜り込んだ。「ほら、暖かいでしょ？」

暖かいことは暖かいが、女体の匂いが蒸れて——それを好ましいと思うほどのレズっ気が蕾には無かった。男性の獣じみたアポクリン腺の匂いのほうが好みだった。

「ひゃんっ……」

芽美が腰を跳ねた。

「お近づきの挨拶よ。可愛い反応ね」

「野乃花さん。芽美ちゃんはバージンなんです。あまり虐めないでください」

「ええっ……まさか!？」

麻凜にたしなめられた野乃花が驚く。そうではないかと疑っていたSOSの他の三人は、驚きはしなかったが、それぞれに溜息を吐いた。

妄想ばかりが突っ走って。お金持ちのイケメンと、海に見えるホテルのスイートで最初からアクメに達するような目くるめく初体験を夢見るか——誘拐されて輪姦されて、さらに縄や鞭で弄ばれる場面に憧れるか。すくな

くとも、ここにいる八人は後者のはずだった。しかし、妄想を実行に移すのに、たとえば木島菜穂子が初めて縛られたのは処女喪失後四年を経ていたし、ポニーガールにされたいという願望が達成されるまでには七年を要している。

芽美の実行力には、蕾を除く全員が素直に驚き呆れて羨んでいた。

蕾は。高山社長にはハードマゾの素質が十分あると太鼓判(?)を捺されていたが、当人としては、漠然とした妄想はあるけれど、今のところは高収入に釣られたと思っている。それにしても、股下ゼロセンチのミニスカに生足という露出を、会社の指示でもなく自発的にしてのけて、流れとはいえ[古式豊かな]試練を志願したあたり、やはり高山の目は曇っていないというべきだろう。

## 2. 得度

八人のくんずほぐれつがその先の段階に進む前に、朴念と訥念の二僧が呼びに来た。

素裸で外に出ると、それまでが温かっただけに、寒さが身に沁みる。

白い息を吐きながら本堂に上がると、本尊を背に、釈覚と僧衣にあらためた妙覚。その左右に朴念と訥念が並んだ。四人に向かい合って正座した女性を、防寒仕様の作務衣を着た十二人の男たちが車座に囲んだ。

「得度の前に、当寺における行儀作法を仕込んでやらねばなるまい。そのように膝を閉じて座ってはいかん」

必ず四十五度以上に開いて、立てた踵に尻を乗せる。両手は膝に乗せておくこと。

「なにがあらうとも、じゃ」

腰を浮かし気味にしているから、女性器は撻られ放題。それに抵抗してはいけないと、蕾は正しく理解した。座禅の場だけでなく、まさしく行住坐臥、一日まるごとが修行（被虐）なのだ。

立ち居振る舞いについての心得が、あれこ



れと続く。僧や先達(つまりサディスト男性)の顔を直視する非礼は許されない。女性に法悦を与えてくれる部位の注視していること。けっして前を隠さず、両手は後ろにまわしておくこと。返事に「厭」「できません」は禁句。修行尼に許されているのは「はい」だけ。

聞いているうちに濡れてくるのだから、やっぱり自分はマゾなんだと、あらためて自覚する蕾だった。

「最後に、なんじらの修行を助ける先達を紹介しておく。右端から順番に――健学、大学、元学、純学」

車座の十二人が立ち上がって、名前を呼ばれた者は女性陣の斜め前(上座の四人の横)に立って、横柄にうなずいてみせる。高山社長は十人目に、昭学と紹介された。本名の昭雄から一文字を採っている。

最後に、野乃花と実咲のパートナーが、それぞれ英学、広学と紹介された。一度に十二人も覚えきれないが、問題はない。修行尼としては、『導師様』『介添様』『先達様』でじゅうぶんだった。

その先達が、四人の僧形の左右にコの字型に陣取った。

「実咲、そこへ仰臥せよ」

コの字形の中央を釈覚が指した。

経験者の畑田実咲が前に進み出て板張りの床に仰臥すると、胸の谷間で合掌して目を閉じた。

朴念と訥念、二人の介添僧が水の入った手桶と剃刀などを実咲の横に置く。

「晴学。引導してやれ」

小太りの中年男が実咲の横に座って。小箱から粉石鹼を掌に塗って水で湿してから、股間を撫でる。そして、淫毛を剃り始めた。頭を坊主にするわけにはいかないから、その代わりという名目だ。

晴学は慎重な手つきで剃っていくが、女の股間を剃るのはこれが初めてらしい。下腹部を剃り終えたときには、褌の部分に小さな赤い筋が何本か刻まれていた。

晴学は実咲の両脚を折りたたんでマンガリ返しにすると、後門のまわりにまで剃刀を当てた。そこにも、切り傷がついた。

最後に、血止めの軟膏をねちねちした指づかいで塗りこめて。実咲の得度が終わった。

「これから、なんじはショウインじゃ。実咲の『咲く』に、淫乱の『淫』じゃ」

実咲が身を起こして土下座する。

「はい、ありがとうございます。どうかご存分に咲淫の身体に荒行を、心に従順を叩き込んでくださいませ」

実咲が列に戻ると、つぎに島野乃花が指名された。引導は、晴学よりいくらか若く見える大学。やはり下腹部に剃刀傷を負わされて、法名（などと称しては仏罰が当たりかねないが）は花淫を与えられた。

三番目が蕾だった。先の二人にならって、胸の谷間で合掌して、まさしく俎板の上の鯉になった気分。二十代後半の二人と違って、仰臥しても盛り上がりがちとも潰れないのを、こっそりと誇らしく思ってもいる。

駐車場で全裸を晒してからずっと、なにもかもが初体験づくめだ。緊縛と縄禪は高山社長に経験させられたけれど、『試練の石段』はまったく別物だった。野外露出、寒気責め、股間への激烈な刺激。今さら、剃毛の場面を大勢の男に見られるくらい、どうということもない——と、蕾は自分に言い聞かせた。

ざりざりと粉石鹼がまぶされて。寒風に全身を曝すのに比べれば、局部への冷水なんか愛撫に等しい。そして、鋭利な刃物が肌を滑

る、背筋がきゅんっと縮かむようなスリル。マングリ返しで後門まで晒されたときは、さすがに羞恥で肌が火照った。

けれど、蕾は男運（？）に恵まれていた。引導したのは元学という五十過ぎの男だったが、剃毛プレイの経験があるらしく、ひと筋の傷も残さずに得度してくれた。

「なんじは蕾淫じゃ」

「はい、厳しくご指導ください」

短く挨拶して、列に戻った。

四人目は林円花で円淫。つぎが小室ゆかりだったが、彼女の申し出には釈覚たちが仰天した。

「うち……上も下も得度してもらえませんか？」

ツアー参加者の願望を把握していると思っただけに、麻凜と蕾も、やはり驚いた。高山だけが、落ち着き払っている。

「う……いや、しかし。それでは、後が面倒じゃないのか？」

釈覚が地を出した。

「うち……恋人未満の男に捨てられて、心機一転したいんです。仕事も心配ないです。尼さんソープに、話はつけたります」

彼女が現役ソープ嬢だとは、蕾も知っている。しかし、それにしても、『パイパン倶楽部』なんて店は知っていたが、尼さんソープとは初耳だった。世に変態の種は尽きまじ——高山社長の冗談(本気)を思い出してしまった。

「本式に修行をしたいというのだから、結構な申し出じゃありませんか。ぜひ、希望を叶えてやって——淫爛よりも厳しく仕込んでやりましょう」

ずっと控えていた妙覚が、結論を出した。彼が主催者であるだけに、釈覚も反対はしない。

「あの……よろしければ、拙僧が剃髪を務めますよ」

訥念も積極的だった。釈覚は妙覚と違ってきちんと僧籍にあるが、わずかに伸びた自分の髪は剃れても、弟子など持ったことがないので、まともな得度を与えた経験が、実は無かった。

「う、うむ。では訥念、そなたにまかせる」

釈覚もどうにか調子を取り戻して、重々しくうなずいた。

朴念と訥念が剃髪の準備をしているあいだに、予定通りの人選で得度プレイが行なわれ

て。それから、本式の得度となった。得度とは剃髪そのものを意味せず、仏の道に入る儀式を指すのだが——ゆかりは、それまでの人生を捨てるような決断で臨んでいるのだから、やはり『得度』がふさわしい言葉だ。

首から下をシートで包んで、まず鋏で髪を短く切って。それから二十分ほどを掛けて、ゆかりは一ミリの髪も残さない丸坊主に仕上げられた。彼女の法名は、平仮名から一文字というわけにもいかないので悦淫と、これは最初から決めてあったとおりに付けられた。

ちょっとだけ厳肅だった空気が、また妖しく揺れて。

六人目が君島芽美。観念したというか度胸がついたというか。羞恥に肌を染めることもなく得度を受けたが、男の手が触れるたびにピクンと身体を震わせていたのが、蕾の目にも初々しく見えた。芽美の法名は芽淫。

「さて、つぎは菜穂子であるが……」

同じように仰臥させてから、釈覚が「ううむ」と腕を組んだ。菜穂子の下腹部には焼き印が刻まれている。無毛にちかいが、生き残っている毛根もあった。下手に剃毛すれば、せっかくの焼き印を削ぎ落としかねない。と

いって、一本ずつ抜くのは手間だった。

「よろしい。なんじの得度は、それがしが授けてつかわそう。朴念、あれを」

ゆかりのときとは違って、腕をこまねいたのは芝居だったのだろう。朴念が本堂の隅から殺虫スプレーを持ってきた。

「……………」

蕾を含む半数の女性は釈覚の意図がわからず、わかっている者は一抔の懸念（火炎放射器遊びは、稀に爆発事故を起こす）を感じながら、スプレー缶を手にした釈覚の行動を見守っている。

釈覚が菜穂子の横に立って、スプレーを下腹部に向けた。左手に持った細長い着火ライターをノズルの前にかざしている。

「あ……………」

蕾が理解したとき。

シュボオオツ……………」

太い炎が、菜穂子の下腹部を舐めた。

「んっ……………」

菜穂子がかすかに呻いたが、すぐに火は消えたので、そんなに熱くは感じなかったらしい。わずかに残っていた淫毛が、チリチリと燃え尽きる。

シュボオオッ……

シュボオオッ……

肌をいたわると同時に、スプレー缶の内圧の回復のために数秒ずつを空けて、炎が三度股間を舐めると、菜穂子の下腹部は（焼き印を除けば）他の六人と同じになった。さらに、マングリ返しの後門にまで炎が浴びせられた。

「股座に淫らな文様を持つなんじには、年齢と所業にふさわしい名を授けてやる。淫らに爛れると書いて、インランじゃ。修行だけではなく、先達の手助けにもこき使ってやろうぞ」

「はい、ありがとうございます」

ポニー牧場と同じで、事前に高山社長から主催者に伝えられている菜穂子本人の希望だった。あのときほどの格差（ポニー牧場にはほんとうの少女もいたし、菜穂子のウエストはヒップと同サイズだった）はないにしても、他の七人が二十代以下なのに、彼女は三十九歳。同じに扱われては、自分が惨めになる。

「さて、最後は麻凜じゃが……」

积覚は微苦笑している。

「自前で得度を済ませたとは、殊勝ではあるが傲岸じゃな」



麻凜を前で開脚正座させておいて。ふたたび釈覚が、今度は背後に立った。

麻凜はもともとボブカットだったが、素潜りの妨げにならないよう、夏に短くしている。その髪をつかまれて、麻凜は表情を（被虐や悦虐からはなれて、素の部分で）硬くしたが、逆らう気配は見せなかった。

ジャキッ……

ちょうど首筋が露出する幅だけ、十センチほども髪が切り取られた。

「ま、これくらいで勘弁してやろうぞ。なんじは凜淫じゃ」

こうして得度式は終わった。

修行尼となった八人に、修行衣が与えられた。『衣』というべきか。尻がかろうじて隠れる袖無しの白い法被だった。肌は透けて見えるし、ちょっと動けば股間が見えてしまう。もちろん、防寒の役にも立たない。

こんなものを着せられるくらいなら、全裸のほうがずっとましだと蕾は思ったが、それは羞恥の本質を理解していないからだった。たとえ身体の一部を隠す役にすら立たなくても、「着ているものを脱ぐ／剥ぎ取られる」という行為は、やはり恥辱であるし、素肌に責

めを受けるという覚悟を女にうながすのだと——これは先輩の麻凜でなく、『善羅参禅会』の経験者である実咲から教えられた。

露出服としかいいようのない薄物を全員がまとい終えるのを待って、釈覚がつぎの指図をする。

「淫爛を除く修行尼は、夕食養虐まで女人房で休んでおれ。淫爛、なれには雑用を命じる」

禅寺では、食事のことを養身という。身を養うという意味だが。これをもじって、被虐に耐えられる体力を養う——とでもしたのでろう。

菜穂子を残して、七人が引き上げる。菜穂子は作務衣の男たちに、本堂の裏手へと追い立てられた。そこには、宿坊よりずっと古い木造平屋が建てられていて、厨房になっている。料理を作らされるにせよ、隣接する食堂への配膳を命じられるにせよ、火の気のある所での作業だから、むしろ好待遇ではないかと思う者もいたが——後で本人に尋ねたら、やはり虐待だった。

菜穂子に与えられた仕事は、不燃ゴミの運搬だった。かさばるポリ袋を肩にかついで、駐車場の一角に置かれたコンテナまで運ぶ。

手ぶらで登るよりも危ないくらいだが、命綱はつけてもらえた。石段の中央に太い綱を張って、それを股間で挟んでこすりながら、登り降りする。腰の前後に装着させられた器具が常に縄を保持しているので、ふつうの綱渡りより食い込みは厳しいが、つまずいて転びかけると器具と綱の角度が変わるので、それがブレーキになるということだった。

「下りでも最低一回、上るときは三回くらい達してしまった。素敵な体験でした」

蕾は頭の中で、『虐待』の文字を消して『悦虐』に書き換えた。

またみんなで毛布にくるまって寒さをしのぎながら。本来ならゆかりが質問攻めに遭うところだったが、SMを理解してもらえずに男に捨てられたという事情は他人事とは思えず、むしろその話題は避けられていた。それよりも――剃られた股間を自分でさわってみたり、他人の股間にも手を伸ばしてみたり、だんだん妖しい雰囲気になってきたところで、夕食になった。

食堂も板張りだが、玄関口の三和土が異様に広い。修行尼たちはそこに座らされて、直置きされた食器で食べた。

ここでも、菜穂子だけは別扱いだった。ずっと外で待たされて、食事の後片付けだけを命じられた。つまり、勝手に残飯を食えということだ。菜穂子は半ば恍惚として、下女だか使役奴隷の役割を受け容れたのだった。

食事が終わると、菜穂子を除く全員が本堂に集められた。芽美が十六人の男たちに取り囲まれて、残る六人の修行尼は、片隅へ追いやられた。

「芽淫。なんじはまだ娘の身じゃ。それでは修行に差し障る。これから、なんじを一人前の女に育てやる。ありがたく受け挿れよ」

一瞬、ぽかんと釈覚を見上げていた芽美だったが、『娘』と『女』の使い分けを理解して、頬を朱に染めた。

ツアーに参加申し込みをする前に座禅転がしの意味を説明されただけでなく、西川麻凜に念押しまでされて、それでも決行したのだから。じゅうぶんに覚悟はできているはずだった。それでも、芽美は悲しそうにうつむいた。

その表情の意味を、常識とは真逆に解釈しなければならないことを、麻凜と蕾（そして

高山社長) は知っていた。

蕾は、年下の少女に同情を覚えた。大勢の男女に見られながら処女を破られることに、ではない。返事ができないよう猿轡を噛まされて散々に拷問されてから「どうぞ、犯してください」と言わされる夢がかなえられなかったことに――だった。もっとも。妄想どおりのロストバージンを体験できる少女なんて、そうはいない。世間一般の目で見てじゅうぶんにアブノーマルで被虐的な初体験なのだから、それで満足しなさいよ――という、嫉妬めいた心の動きもあったのだが。

「……はい、よろしくお導きください」

雰囲気に気圧されたのか、得度式のときのやり取りが念頭にあったのか。芽美は年齢にそぐわない言葉を口にした。

「うむ。殊勝であるな。では、支度を調べよ」

朴念と訥念に両側から腕を取られて、芽美が立ち上がる。立たされて、露出修行衣を男の手で脱がされて。そのまま外へ引っ張られた。

「あの……」

「不浄の穴は、まず清めておかずばなるまい」

不得要領に、しかし問い返す勇気もなく、

手を引かれて外へ向かう芽美。

「なんじらの中にも未経験の者がおれば、芽淫と並べて貫通してやるぞ」

『不浄の穴』と聞いたときから、蕾は理解している。そして、彼女にもそれくらいの経験はあった。もちろん、全員がそうに決まっている。

男たちが、ぞろぞろとついていく。本堂に残ったのは釈覚、妙覚、そして高山の三人だけだった。

「君たちは見学しないのか？」

居残っている女性たちに、高山がからかい半分の声をかけた。

「見るのも見られるのも、厭です。でも、どうして……先達様は残られたのですか？」

「僕も、言ってみれば主催者側に近いからね」

「あ、それは……」

釈覚がなにか言いかけるのを、高山が手を挙げて遮った。

「ここにいる女たちの中で、僕の正体を知らないのはパートナーと参加した二人だけですからね」

SMツアー社経由の参加者ではない美咲と野乃花も、他の六人の態度から何かを感じい

ている可能性はあった。

高山は、あらためて自分の正体を明かしてから、付け加える。

「先達の連中には、内緒にしておいてくれよ。無料参加だと知られると、恨まれかねない」

単独参加の男は、古武術研究会員であるなしにかかわらず百万円の参加費。ペアで参加する者でも二十万円だった。これを暴利と思うか格安と判断するかは、当人の趣向と欲求次第だろう。

ちなみに、女性の単独参加者には二十万円が『交通費その他』として支給される。S O S ツアーが諸経費不要をうたっているのは、この二十万円が充てられるからだ。麻凜と蕾も二十万円を手にはできないのは同じだが、七日間の添乗員手当はそれ以上になる。

「いやあああっ……！」

夜のしじまを貫く、芽美の悲鳴。しかし、どこか芝居がかっていると、蕾は感じた。拷問とレイプ強制懇願の妄想は実現できなかったかわりに、ヴァギナとアナルを（もしかするとオーラルも）同時に開通させられると知って、被虐に酔っているのかもしれない。

二度と悲鳴が聞こえなくなったのは、無駄

な抵抗で時間をつぶすのが惜しくなったのか、あるいは口をふさがれたのか。

十五分ほどで、芽美が戻ってきた。裸身をバスタオルでくるまれている。しかし、それもすぐに引き剥がされて、本堂のまん中に開脚正座させられた。それを、男二人と女一人とが交互に並ぶ車座が取り囲む。

先に純学と紹介された先達が立ち上がって、作務衣を脱ぎ捨てた。下は、これも『らしさ』の演出だろう。六尺禪一本だった。その六尺禪も取り去って。

純学が芽美の正面に仁王立ちになった。BMIでいえば30に迫る肥満体なので目立たないが、年齢のわりに大きな角度で屹立したそれは、標準より明らかに大きい。

口元に勃起を突きつけられて、明美がのけぞった。そのまま男の顔を見上げて、すぐに釈覚が言うところの『女性に法悦を与えてくれる部位』に目を落とす。十秒以上の逡巡が続く。

「舐めろ。濡らしておかないと、痛い思いをすることになるよ」

うながされて。芽美が、ほっとした表情になった。被虐妄想に浸かっている彼女は、み



ずから進んで淫らな行為はしたくない。命令されてやむなく従うという手順が必要だったのでろう。

腰を浮かして、上からおおいかぶさるようにして、亀頭部を咥えた。

チュパチュパと音を立ててすすり、それから根元まで呑み込む。AVあたりで仕入れた知識だろう。行為の大胆さのわりに、仕種がぎこちない。上体を揺るようにして、口のピストン運動をする。

「初めてにしてはうまいな。それとも、すこしは経験があるのか」

男としては、褒めながらからかったつもりなのだろうが。

「……初めてです！ なにもかも、初めてなんです！」

芽美は叫ぶように答えて、床にあお向けになった。両手で顔をおおっている。

「もう、虐めないでください。早く女にしてください」

突然の感情の爆発に、蕾は驚かされた。腸に水を注入されて、大勢の男に見られながら排泄する。その行為だけで、すでに芽美の心は崩壊寸前に達していたのかもしれない。

「……………」

男も戸惑った表情で。しかし勃起は衰えることなく。芽美の膝を割って、その間にしゃがんだ。芽美の膝を肩に担いで、おおいかぶさる。芽美の腰が宙に浮く。

左手で体重を支え、右手で勃起を握って。探るように腰を進めた。

「う……くううう」

芽美のくぐもった呻き声を頼りに男は腰を微妙に動かしてから。

「いくぞ」

ぐううっと、腰を沈めていった。

「ぎびいいっ……痛い！」

芽美は両手で床を突っ張って、ずり上がるうとする。男がいつそうおおいかぶさって、芽美の両肩を押さえ込んだ。

「痛い痛い痛い……うあああ！」

半分は自分への演技だと、蕾は断定した。被虐に酔っている。

男がそれに気づいたか、どうか。しかし、芽美の悲鳴にいつその嗜虐心を掻き立てられたのは確実だった。

「まだまだ、痛くしてあげるよ」

男は上体を起こして、芽美とほぼ直角の体

勢になった。腋の下を両手で抱いて、ゆっくりと後ろへ倒れていった。途中からは片手で自分の身体を支える。

男が仰臥すると、芽美はその腹の上に乗せられている形になった。貫かれてはいるが、男が動かないので、芽美の悲鳴はやんでいる。

男が芽美を引き寄せて四つん這いにさせた。

車座の中から、二人の男が立ち上がった。ひとは、アスリート体型の若い――まずまずのイケメン。もうひとは、小柄で痩せた三十歳くらい。法名だかプレイヤーIDだかは、善学と俊学。二人とも悪びれるふうもなく、全裸になって芽美の前後に立った。

善学が後ろから尻を抱えて――体型と同じで、ややスリムだが鉄骨のような勃起を、芽美の尻に突き立てた。

「あ……ぎゃがああっ……熱い！」

破瓜のときよりも短いが、いっそう凄絶な悲鳴が芽美の喉から迸った。

無慈悲な貫通に見えるが、芽美の後門のまわりが照明を照り返していたのに、蕾は気づいている。事前にローションかワセリンを塗り込められていたのだろう。

「うあああ……あ、熱い！」

潤滑されていない状態で無理矢理に貫かれれば、個人差はあるだろうが、蕾の場合は激痛にのたうってしまう。痛いのではなく熱いのは、限界まで括約筋を割り広げられるときの感覚だ。未経験の処女を無慈悲に強姦しているようで、実はそれなりの配慮が払われているところに、蕾はサディストたちの優しさを見た。などという甘い思惑は――翌日には微塵に砕かれるのだが。

善学が芽美の手首を握って、手綱を引き絞るように引いた。芽美の上体がすこし起こされて――正面に立ちはだかる俊学の勃起の高さに顔がきた。

「ほら、あーん」

優しく声をかけた俊学だったが。芽美がわずかに唇を開けると、容赦なく怒張を突き挿れた。

「んぶ……むぶう……」

みずから動いて口に挿れるのと、強制的に突っ込まれるのとでは、まるきり感触も感情も異なる。フェラチオがSEXならイラマチオはSMだと、蕾は思っている。たとえ苦しくても、強制されるほうが好きだろうと、蕾は自分の性癖で芽美の思いを押し量った。

「よーし、動くぞ」

「善学くん。きみが音頭を取ってくれ」

言われて。イケメンアスリートが腰を前後に振り始める。いや——パンッと音がするほど急速に深く下腹部を芽美の尻に打ちつけて。名残を惜しむかのようにじんわりと引き抜く。そして、またパンッと一気に貫く。

「んぶっ……んんんん……んぶっ……」

貫かれるたびに芽美は呻き、引き抜かれる時には安堵の吐息を漏らす。

善学の腰の動きに、芽美の全身が揺すぶられる。それに呼応して、純学が下から突き上げる。俊学は、芽美に怒張を啜えさせてじっとしている。芽美の強いられた動きだけで、じゅうぶんな刺激になっているようだった。「つらいだけでは可哀そうだ。気持ち良くさせてあげよう」

純学が結合部に左右から両手を突っ込んだ。しばらくもぞもぞと手を動かしていたが、肉襞をかき分けているうちに。

「きゃひゃああんっ……」

淫核をつままれたかこねくられたか、芽美がびくっと腰を引いて叫んだ。

「こら、ちゃんと啜えている」

俊学が芽美の頭をつかんで引き戻す。

「んぶうう……むびいっ……」

「おお、いいね。啞えたまま声を出してくれると、ペニスにビブラートが走るよ」

俊学は芽美の頭をはなして、腰を引かないように注意しながら上体を軽く曲げて——両手で乳房を握った。

「では、おれもサービスしてやろう」

四本の指で乳房の根元を支えて、人差し指で乳首をストロークのリズムに合わせて強くこする。

「んぶうう……びゃんっ、びひいい……」

性感帯という性感帯を荒々しく貫かれ、あるいは優しく転がされて、芽美は旋律のもつれたオーケストラのように哭いた。

初体験なのに、一度に三人の男に犯され弄ばれているというのに——エクスタシーには遠いにしても、明らかに性感を得ている。蕾の心に、嫉妬にちかい感情が湧いてくる。彼女は、まだ同時に三穴を犯された経験が無い。調教試験のときに、高山社長に貫かれながらアナルバイブを使われて……麻凜先輩にクニニを強制されたのが、SEXとしては、いちばんハードな体験だった。

腰をもじつかせて、物欲しげな顔をしていたのかもしれない。

両側から男の手が伸びてくる。だが正座中は、膝の上から手を動かしてはいけない。

右から伸びてきた手が腋の下をくぐって乳房をまさぐり、左からの手は太腿を撫でてから、その先へと進んだ。

「……………」

見知らぬ（名前だけ紹介されたばかりの）複数の男に、衆人環視の中で痴漢される。蕾にとっては初めての体験だった。その羞恥が、男の手が触れている個所に過剰な感覚を呼び起こす。しかし、頭の芯は醒めていた。

これくらいは序の口の手前。もっともっと凄まじい恥辱が待っている。自分は、それを悦辱に昇華できるだろうか。

こんなふうに、自分の意志で抵抗を放棄しなければならないのは、つらい。いっそのこと、適性試験のときみたいに、縛られて吊るされて、鞭打たれて激痛にのたうっているほうが、精神的には楽だ——そんなふうにも考えてしまう蕾だった。

「どうにも、動きにくいね」

純学が、芽美を抱いたまま身体を横にした。

アヌスでつながっている善学も、体側を床に着けた。

「左手で突っ張って身体を支えろ」

俊学が芽美の髪をつかんで斜めに引きずり上げた。

「むぶう……んんんんんん」

身体をひねって、上体は斜めに起こされて、芽美は不自然な姿勢を強制された。

俄然、純学の腰づかいが激しくなった。意図を察して、善学も片膝を突いた姿勢でリズムに合わせる。負けじと、俊学も傾いた身体を片手で支えて、腰を芽美の顔に激しく打ちつける。

パンパンパン……

ぬっちゃぬっちゃ……

ジュボジュボジュボ……

蕾の耳に、卑猥な音が届く。急に大きくなったのではない。今ごろになって気づくのだが、身体を騷られていたのは彼女だけではなかった。七人の女性に、きっちり二人ずつの手が伸びていた。車座は女七人と男十三人なのだが、妙覚が二人の女性の間陣取って両手を使っているから、男手はきっちり足りている。



その手が止まって。女性も身悶えをやめて——フィニッシュの瞬間を見届けようとしていた。

「んんん……びひいっ……ぶむう」

まだ続く破瓜の痛みと、稚い身体に芽吹く性感との板挟みの中で、芽美は激しく揺すぶられ続けて。

不意に男たちの動きが止まった。ほぼ同時に射精したようだった。

男たちが引き下がって。芽美は安心して、打ち捨てられた人形のように、床に転がっている。

「淫爛、この場で芽淫の跡始末をしてやるのじゃ。ティッシュなどは使うなよ」

「はい」

菜穂子が車座の中央に進み出て——鮮血と白濁とにまみれた股間を見て。白い修行服が汚れるのを嫌ったのか、男の目を意識したのか。菜穂子も全裸になった。ポニー牧場での苛酷な労働とハーネスの締め付けとで、デブからグラマラスに変身した四十路直前の爛熟した裸身が、芽美の横に座った。

「ちゃんと、ゴクンしなさい。それが、お作法です」

半開きの口から精液がこぼれているのを見て、菜穂子が叱った。

芽美がぼんやりと菜穂子の顔を見上げて、放心した表情のまま口を閉じて。嚙下するまでには、十秒ほどかかった。床にこぼれた唾液混じりの淫汁は、菜穂子が四つん這いになって舐め取った。

そのまま芽美に、69の形でおおいかぶさる。

「つぶれた苺ケーキみたいね。おいしそう」

そんな冗談を言って、芽美の股間に顔をうずめた。

ピチャピチャピチャ、ずずずずずず——わざと音を立てて、淫裂から残滓をすすり取り、大淫唇の裏表まで舐めつくす。さらに頭を突っ込んで、アヌスのまわりを清め、尖らせた舌先を中にまで差し込んだ。

そのあいだ。股間を芽美の口に押しつけて腰をくねらせていたのだが——芽美からの『お返し』はなかった。

あわよくばレズプレイに雪崩れ込もうという菜穂子の目論見は、空振りに終わった。

「妙覚殿。すまぬが、芽淫の手当を頼みますぞ。明日からは鍛えてやらねばならぬでの。

淫爛、芽淫を女人房まで運んで、妙覚殿を手伝え」

菜穂子が、わずかに不満を顔に浮かべた。残った六人の女性が、これから十五人の男たちにどう扱われるか、予想したのだろう。

果たして。

「修行尼どもも、さんざん見せつけられて、けしからぬ心持ちになっておろう。皆の手で——いや魔羅で、煩惱を打ち払ってやるのじや」

手順は事前に打ち合わせてあったのだろう。男たちの中で先達だけが立ち上がって、二人がペアになって、女性をひとりずつ本堂から連れ出す。

蕾の先達は、英学と秀学だった。英学は野乃花のパートナーで、彼女の言によると『サディスト修行中』だそうだ。三十くらいか。がっしりした体格だが、どこかチャライ印象がある。一方の秀学は、英学より五つ六つ年上。取り立てて特徴はないが、なんとなく女性を見る目が冷たいように思えた。

連れて行かれたのは、厨房の横にある食堂とは反対側の建物の——前だった。そこが浴場だとは知っているが、人数に合わせた六本

のホースが引き出されていた。ホースの先は細長いノズルで終わっている。

六人は横に並んで四つん這いにさせられて。一斉にノズルを突っ込まれた。

「痛い……」

声をあげたのは蕾だけだった。

ぶじゅうううる……

冷水が腸に押し入ってくる。

ぐるるるるる……

腹の中で水がうねる。

「すぐに出していいぞ」

ノズルを抜かれても、蕾はためらって、括約筋を締めていたが。

びちゅうううう……

ぶしゅるるる……

びちびちびちっ……

左右から聞こえてくる濁った水音に、蕾も観念した。

ぶじゅじゅじゅじゅ……

激しい水流に括約筋が震える。ふつうの排便よりも心地良いくらいだった。

もう一度洗滌が繰り返されて。下半身に水を浴びせられてから。風呂で汚れを落としてこいと、バスタオルを与えられた。

風呂場は広かった。浴槽は十人くらいが入れる大きさだったし、洗い場は四人同時にマットプレイができるくらいの広さがあった。そんなことを考えたのは、現役ソープ嬢のゆかりの丸坊主頭が、今も強烈なインパクトを与えているせいかもしれない。

ざばざばと湯をふんだんに使って、全員がていねいに股間を（前も後ろも）洗った。蕾としては、できれば歯磨きもしておきたいところだったが、四つの蛇口はすべてホースでふさがれている（二つは、ホースが二股になっていた）し、もう男性が浸かっているかもしれないと思うと、湯を掬ってうがいをするのも気色悪かった。

身体を拭いたタオルで、芽美のように身体を包んだ。どうせすぐに引き剥がされるとわかっているけれど、屋外にいるあいだは寒気をすこしでも遮っていたい。こんな分厚い生地を肌にとえるチャンスなんか滅多にないと思うと、微妙に幸せな気分さえなってくる。そして。引き剥がされるときの惨めな思いを想像して――きゅんっと、子宮が痙攣した。

もちろん。そんなささやかな屈辱に浸って

いる暇なんかなかった。本堂に戻るなり、文字通りの『魴』が始まった。

バギナとアヌスとオーラル。このうちの二か所を同時に犯されると覚悟（期待）していた蕾だったが。蕾の体内に侵入してきたのは英学だけだった。秀額は、背面座位で貫かれている蕾の前で胡坐をかいて、乳首を中心に虐めることに専念している。

乳首に爪を立てて、前へ引っ張る。

「英学くん。身体を起こしてやれ」

羽交い絞めにされて、のけぞらされて、ささやかな乳房が細長く変形するまで乳首を引っ張られた。

「ぎひいいい……痛い。赦してください」

以外にも、あっさりとは解放された——と思った直後に。

バシン！

ビンタを食らった。耳の中がキインと鳴っている。

バシン！

反対側にも食らった。

「これも修行だ。甘ったれるな」

修行尼に許されている返事は「はい」だけだから——赦しを乞うのも間接的な拒否なの

だろう。

「すまんが、ちょっと動かないでいてくれ」

英学に声をかけて。今のビンタですっかり縮こまってしまったクリトリスを、秀学がほじくりだした。包皮を剥き下げて、実核に爪を立てる。

「すこしは自分で動け」

実核が引き伸ばされて、さらに吊り上げられる。

「ぎびいいい……」

痛みをやわらげようとして自然に腰が浮く。

ずぬるっ……怒張が抜けかける感触があった。と同時に。今度は下へ引っ張られた。

「痛いっ……」

すといと腰が落ちて、ずぐうっと奥までうがたれた。

「もっと早く、もっと激しく。ほら、イチニ、イチニ、イチニ」

秀学の指の動きに操られて、蕾の腰が大きく上下に動く。動かすしかなかった。

こんな状況では、ようやく覚えかけた膣性感が発動するはずもない。クリトリスも激痛に埋もれていた――のだが。だんだんと痛覚が麻痺してきて。じいいいんと痺れるような

感覚が忍び入ってきた。もちろん、それは性的な快感ではないのだが。男にこれほど残酷に扱われているという屈辱に、胸の奥がきゅうんっと絞られるようだった。これも悦虐のひとつの表現だと、蕾は理解する。

ぬっちゃぬっちゃぬっちゃ……

性的快感からは程遠いのに、蕾は熱い汁をあふれさせ、それを自ら激しく攪拌し始めている。

「出来上がってきたな。こっちも愉しませてもらおうか」

秀学が立ち上がって、怒髪天を衝くばかりの逸物を蕾の唇にあてがった。

蕾がすぐに口を開けなかったのは、添乗員としてどう振る舞うべきかを考えたからだった。素直に応じるのが、もっとも楽な対応だけれど。無理強いに口をこじ開けられるとか、降参するまで乳首やクリトリスを虐められるとか、それもマゾ女として好ましい姿かもしれない。悦虐のお手本。けれど、参加者よりも自分のほうが若いし、経験値も違い過ぎる。サディストとの駆け引きなんて、自分のほうが参加者から教えてもらおう立場だ。

蕾は、ぱっくんと怒張を頬張って、まだま



だ拙いと自覚しているテクニックを総動員して奉仕に務めた。

ぺちやぴちよ、ちゅぱちゅぱ、ずぞぞぞぞ。亀頭を舐め、カリクビをしゃぶり、音を立てて啜り込んで、みずから喉の奥に怒張を突き立てた。最後のは、張り切り過ぎてえずきそうになったけれど。

英学はペースを落として、蕾の中をじっくりと楽しんでいるが。秀学のほうは、SEXの快感を長引かせるつもりはないらしい。途中から蕾の頭をつかんで激しく衝き動かして、さっさと放出してしまった。しかし、頭をつかんだままはなさない。ゴクンを強制している。

これも初めての体験だった。わずか数ミリリットルなのに、喉に引っ掛かって、なかなか飲み下せなかった。英学に下から突き上げられながら、やっと嚥下したが、いがらっぽい感じが喉の奥に残った。

秀学は、まだ腰を引かない。

「ん……？ ん`む`う`う`……！？」

おびただしい量の生温かい液体が、口の中にあふれた。反射的に口を開けかけて。気力を振り絞って――床に小便がこぼれるのを防

いだ。汚せば、サディストどもの思うつぼだ。添乗員が率先して懲罰を受けるというのも『有り』かと思ったが、これしきのことにうろたえたと思われるのも癪だった。それくらいには、まだまだ落ち着いている。

「んんん、んんんんっ！」

両手で男を突き放そうとしたが、いっそう強く頭を男の腰に押しつけられたただけだった。

「飲め。全部飲むまで赦さんぞ」

英学も事情を悟って腰の動きを止め、蕾の反応をうかがっている。とりなそうとはしない。

頬が膨れてきた。このままでは、こぼしてしまう。もう限界だと諦めて、蕾は喉を上下させた。

「うぶ……げふっ……」

誤嚥して咳き込み、結局大半を床にぶちまけてしまった。

「この馬鹿者！」

うつむいたところに胸を蹴り上げられて、蕾は斜め後ろにひっくり返った——のは、英学が抱き支えてくれた。

「乱暴だなあ。抜けちゃったじゃないですか」

蕾を床に（かなり優しく）投げ捨てて、英

学が立ち上がった。

「まあ、実弾を一発節約したと思えば、それでいいか。どこか、空いてる穴はないかな」

わざとらしく見回してから、男にサンドイッチにされて腰を振っている坊主頭のゆかりに近づく。

「尼さんにフェラをしてもらうなんて、初めてだ。ソープ仕込みのテクニックを披露してもらえますか」

ゆかりが上体ごと顔を上げて、英学の求めに応じた。

蕾のほうは、秀学に責められ続けている。啞えなおして、今度は口中に溜めずにひたすらに喉を動かして――長い放尿が終わると、床にこぼれた分を舐め取らされた。

四つん這いになって床を舐めていると、身体にかかった小便が垂れ落ちて、そこをまた舐めなければならない。レポートで読んだ女囚性務所での懲罰や、動画でも観た使役ロバへの虐待に比べれば、まるきりSMプレイのレベルなのに……涙が床にこぼれ落ちた。もっとも、その涙はかすかに甘いような気がしたのだけれど。

釈覚と二人の介添僧も、十二人の先達が六

人の修行尼の煩惱を打ち払うのを見物していたわけではない。女が六人いれば、穴は十八個もある。つまみ食いといった感じで、六つの『鬮』のあいだを渡り歩いて。先達も適当に修行尼を交換して。そこに妙覚も戻ってきて、十五対六の大乱交となった。

「おや、淫爛は？」

「朝まで芽淫の怪我を舐めて看護できるよう、69の形で縛り合わせておきました」

「最年長と最年少、母子ほども年齢差のあるレズカップルの誕生じゃな」

「さて、そううまく事が運ぶかどうか」

若い友学や善学はもちろん、還暦を過ぎていそうな健学までも、三度も四度も修行尼の煩惱を消し去ってやった。暖房もないのに、広い本堂に熱気と生臭い空気とが満ち満ちた感があった。男どもは精魂尽き果て、女性陣は（蕾以外は）まだまだ余裕。

そして、般若宴が始まった。つまり、酒盛りである。若干のレトルト食品とスナック菓子。アルコールは焼酎のお湯割りが主体だった。

「勤行中はあまり気にならなかつたが、やはり寒いですなあ」

「とって、そんなにカパカパ飲むと、明日に差し支えますよ。座禅修行は朝が早いのですから」

「しかし、なんですか。蓄淫は、まだまだ修行が足りませんね。フェラは下手くそだわ、締め付け方もろくに知らんわ。若いだけ取り柄ですかね」

「そういった未熟者を鍛えてやるのが、そなたたちの務めであろう」

「いや……妙覚師に縛られたときには、うっとりしていたじゃないですか。そっちの方の素質はじゅうぶんだと思いますよ」

「会長は特別だよ」

「だいいち、素質のない女が、こんな所にくるわけがない」

先達連中は、例の防寒仕様の作務衣を着て、四人の坊主もそれなりに厚着をしているが。七人の修行尼たちは薄物の露出修行衣さえ許されず、男の両側に侍っている。抱きすくめられても冷たい衣類が肌に触れるだけで、ちっとも温かくないし。今さら変に身体をいじくられても、さっきまでの乱交が激しかっただけに、官能が掻き立てられることもない。その惨めさをこっそりと悦ぶ境地には、すく

なくとも蕾は至っていない。

惨めといえ。他の五人は、男たちから口移しで酒を飲ませてもらっているのだが、蕾の唇に顔を寄せる男はいなかった。

「便器にキスする物好きはいないぜ」

女性側にしてみれば、小便と精液とではまるきり違うが、放出する側にとっては、それほど違うとは思えない。恥辱責めのひとつというべきだろう。

「仲間外れも可哀想じゃな」

積覚が、そんなことを言いだして。

「花淫、小便を出してこい」

戻ってくると、尿道カテーテルにガラスシリンジの浣腸器をつないで、焼酎を注ぎ込んだ。

「あ……熱い」

膀胱にアルコールが沁みて、ゆかりが悶える。

「それを、蕾淫にふるまってやるのじゃ」

開脚正座する蕾の前に立たせる。

ゆかりが剃髪を希望して、大年増の菜穂子が下女扱いされて、処女の芽美が破瓜ショーを演じさせられて。今度は自分が主役に抜擢された。誇らしいとは思わなかったが。万座

の注目を浴びてつのである惨めさに、胸がきゅうんと絞られる思いは、たしかにあった。

蕾は大きく口を開けて、立ちはだかったゆかりの股間にかぶりついた。

人前で排尿するのは心理的抵抗があって、なかなか出せないものだが。アルコールの刺激のせいか、ゆかりはそういうプレイに慣れているのか。すぐに、蕾の口中に生温かい液体がほとぼしった。

本物の小便より、はるかに飲みやすい。アルコールですこし喉が焼ける感覚も、苦みを帯びた塩味を嚥下するよりも、ずっと好ましかった。

最後はチュウチュウ音を立てて啜り、小淫唇を震わせて、ゆかりを軽く悶えさせたりもした。ふたりとも、演技を交えていたけれど。

九時半にはお開きになって。あとは、男女とも眠るだけだった。

六人が雑居房ならぬ女人房に戻ってみると。菜穂子と芽美は上下逆さに向かい合わせで縛られて、毛布で簀巻きにされていた。ふたりとも安らかな寝息を立てている。

修行衣は毎晩水で洗って外に干す決まりになっているので、全裸のまま毛布にくるまっ

て——初日からのハードな展開で心が疲れて、それなりに酔いもまわっていたので、六人は押しくらまんじゅうで集団レズごっこをするまでもなく、あっさりと眠りに落ちたのだった。